1

その日、四人の人間がメッセージをうけとった。メッセージは突然で、それぞれのもとに届けられたやりかたもちがっていた。ただし、内容は同じで、何かのイタズラかもしれないと思いながらも、決して無視できないようなものだった。また、その内容を平然と無視してしまうような人間だったら、彼らが選ばれることもなかったろう。ただ、そのときは、もちろん彼らは、そんなことを知るよしもなかった。

一番最初にメッセージをうけとったのは、菊川真（きくかわしん）だった。二十八歳、大学中退。今はコンビニエンスストアでアルバイト店員をしている。午前零時にアルバイトが終わり、自転車で八分のアパートに帰って、愛用のワープロのスイッチを入れたとき、メッセージが現われたのだった。

菊川は、この三年アルバイトをしながら、小説の新人賞に応募しつづけている。時代小説とミステリ。ミステリは子供の頃から好きで、推理作家になるのが中学時代の夢だった。高校の後半と大学生のときに、柴田錬三郎と池波正太郎に夢中になり、時代小説も書こうと思いたった。「蔵地（くらち）真三郎」というペンネームをこしらえ、応募原稿の表紙に印字している。蔵地真三郎の作品は、今のところ、「ジャパン探偵小説賞」で二次予選通過止まり、「日本チャンバラ小説大賞」で、最終候補、あえなく落選、といった戦績だ。

菊川が今狙っているのは、十月が募集締切の「恐怖小説新人賞」だった。八十枚の短篇ながら、受賞作は映画化され、賞金も三百万円と大きい。あまりにいろんな賞に応募するのはマイナスではないかとも思うのだが、書きつづけていないと、不安なのだ。「いつかデビュー」を夢見て、散っていった先人はいくらでもいる。不安から逃れるためには、とにかく、書いている他ない。アルバイトをしている時間以外は、一日平均五時間の睡眠時間をのぞき、ほとんどワープロに向かっているか、本を読んでいる毎日だ。

『午後五時、丸池公園噴水前。あなたの助けが必要です。J』

首を傾げた。こんな文章を、今書いている「黄泉村（よみむら）温泉へようこそ」で打ちこんだ覚えはない。いや、その前に書いた「口笛坂の血闘」でも、「落首峠の殺人茶屋」でも打ちこんだ記憶はなかった。

使っているワープロに通信機能はない。電話回線を通じて誰かがこの文章を打ちこむ可能性はない。誰かがこっそりアパートに忍びこんで打ちこんだとしか思えない。

菊川ははっとして、これまで書いた「黄泉村温泉へようこそ」のデータを呼びだした。無事だった。いじられたり消されたようすはない。ほっとして部屋を見回した。なくなっている品物はないようだ。第一、何かをもっていこうにも、古いテレビと小型冷蔵庫以外は、床が抜けると大家に文句をいわれつづけている本の山しかないのだ、ここには。

本の十冊二十冊なら、もっていかれてもわからないが、それほど価値のあるものはない。

丸池公園、午後五時。菊川はため息をついた。これは立派な「謎」だ。誰が何の目的で、どうやってこのメッセージを自分のワープロに打ちこんだのか。それを知るには、自転車で十二分の丸池公園にいくしかない。そしていって「謎」を解くのは、きっと〝作家修行〟の役に立つ。そんな確信があった。

二番目にメッセージをうけとったのは、茂木太郎（もぎたろう）だった。二十四歳、大学院の地球物理学研究室にいる。教授の実験を手伝うのが、目下の仕事だ。地球物理学というのは、簡単にいえば、地球という星の過去を調べることで、宇宙をも知ろうという学問だ。その中には、生物の誕生や地震の発生原理なども含まれる。そしてさらに細かくなれば、地球の誕生をさかのぼって宇宙の始まりといったところにもいきつく。壮大な疑問だが、その答を求めるためには、原子がほんの千粒しか集まっていないような「超微粒子」を研究しなければならない。「超微粒子」は、気体とも固体ともつかない物体で、これが集まって星が生まれる、いわは「星の素」だ。

茂木の所属する研究室は、この「星の素」を研究している。

教授より先に研究室にでて、今日の実験の準備を調えるため、午前八時に、茂木は自分のコンピュータを起動させた。そして発信人不明のメッセージをうけとった。

丸池公園は、研究室の裏手にある公園だ。もとは大学の敷地だったらしいのだが、もう

何十年も前に、市へ別の土地と交換する条件で寄付したのだ。起伏があって湿地も多く、大学施設には向かない土地だったようだ。

湿地は池になり、起伏は雑木林へと変化した。この市で生まれ育った茂木は、丸池公園を小さな頃から遊び場にしていた。

その噴水前、という文字に、誰が書きこんだのだろうと考える以前に、茂木は心がざわめくのを感じた。八年前、今は東京にいってしまった初恋の相手と最初のキスをしたのが、丸池公園の噴水前ベンチだった。

もちろん誰かのいたずらに決まっている。自分のパソコンには、他人が入れないようなロックをかけてあるが、大学には、そんなロックなど、公園の「芝生入るな」の立札ほどにも思わない人間がうようよいる。コンピュータに侵入するのが大好きという、困った手合いだ。

だが「助けが必要だ」という言葉はいたずらっぽくない。ひっかけるのなら、もっと色っぽいメッセージにすべきだ。

問題はJというイニシャルだ。東京へと去った初恋の相手の名は「潤子（じゅんこ）」。

彼女だろうか。そんなはずはない。もう三年以上、音信不通なのだ。噂では、短大をでたあと、東京の広告代理店に就職したという。恋人がいて、もしかしたら、結婚なんていう話がでていても、おかしくない頃だ。

茂木は首をふった。噴水前とJ、このふたつの言葉がなければ、さっさと消して忘れて

しまったろう。でもこの言葉がある限り、自分は無視できそうもない。

三番目は、メッセージをうけとる、というのとは少しちがっているかもしれない、赤道目子（まなこ）だった。難しい名だが本名で、祖父がつけた。二十歳の独身女性だ。職業は、「赤道真眼流卜占術（しんがんりゅうぼくせんじゅつ）総帥（見習）」。

赤道真眼流は、目子の祖父がおこした卜占術、つまり占いの流儀だった。祖父赤道環（たまき）は、中国の五行、干支、占星をもとに、自らの運勢を好転させるという赤道真眼流をあみだした。この赤道真眼流を用いれば、邪気をはらい、運気を好転させ、その進むところすべてに幸運をもたらすという。

だが残念なことに、赤道真眼流の開基には六十年の時間が費やされ、赤道環は、真眼流をあみだしてわずか一年でこの世を去った。

赤道環の長男原子（げんじ）は、占い師兼煙草屋（環の副業）のせがれとして工業高校にいき、卒業後は家電メーカーに就職、五十歳の現在、卜占術とは何のかかわりもない人生を送っている。

環の才能と情熱をうけついだのが、原子の娘で、環には孫にあたる目子だった。小学校四年生のときから指導をうけ、高校二年で祖父を亡くすまで、三世代同居の自宅で研究を共にしていた。原子はそれを嫌い、娘には、もう少し地道な人生を歩むことを願ったが、目子は高校卒業と同時に、真眼流の後継者となることを宣言、自宅をとびだした。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。